

全国から80選手が集結、2種目に体力と技術を競う

秋田わか杉国体山岳競技リハーサル大会

第62回国民体育大会(秋田わか杉国体)山岳競技のリハーサル大会が6月9日、森吉地区で開催され、全国から参加したエキスパートが「縦走(じゅうそう)」と「クライミング」の2種目で体力と技術を競い合いました。

森吉山森吉スキー場周辺に設置された特設競技場を会場に行われた縦走競技は、コースを決められた重さのザックを背負って山を駆け上がる速さを競うもの。世界では、「山岳マラソン」として盛んに行われています。

またクライミング競技は、高さ15mも人口の登はん壁を登り、規定時間で到達する高度を競う種目で、森吉スポーツ公園内の同競技場で行われました。国体本番での山岳競技は、成年男女・少年男

女ともに、県別に3人が1チームとなる団体競技。3人のうち、縦走専門の選手が1人、クライミング専門の選手が1人、縦走とクライミング両方に出場する選手が1人のチーム構成となります。

リハーサル大会は縦走、クライミングともすべて個人競技。エントリーしたのは、縦走競技では成年男子に40人、成年女子7人、少年男子8人、少年女子2人の計58人。またクライミング競技には、それぞれ成年男子8人、女子5人、少年男子6人、女子4人の計22人がエントリーしました。

秋田県からは、縦走競技に11人、クライミング競技に8人。うち北秋田市からは縦走・成年男子に野呂康一さん(鷹巣・石巻岱)、成年女子に吉田麻衣子さん(合川・川井)が出場し、全国の強豪と競い合いました。



▲壁の上部は勾配があり選手を苦しめる



▲最後の力を振り絞りゴールまであと少し

クライミング競技

クライミング競技は、森吉スポーツ公園内に作られた、約15mの人口の壁を「ホールド」という手がかり、足がかりを利用してよじ登り、限られた時間内で到達高度を競います。

競技中は、ザイル(命綱)で選手を確保しているため落下しても安全ですが、観客は「落ちる、落ちる」とハラハラ・ドキドキ。どのルートを登るかの判断力が勝敗のカギとなるスリリングな競技です。施設は、1つが幅4メートル、高さ15mの巨大な4基の人口壁。選手にとっては高くなるほど勾配がきつくなり、体力とともに判断力が勝負を分けます。

会場には、観覧席となったスポーツ公園内の大テントに200人ほどの観客が集まりました。選手が最高点まで登りきるうとすると「おー」、また惜しくも落下すると「あー」と歓声を上げながらスリリングな競技の観戦を楽しんでいました。



▲選手の頑張りに歓声が沸く会場



▲力強く宣誓する畠山陽輔選手

縦走競技

秋田わか杉国体で最後となり、その幕を閉じることとなる「山岳縦走競技」は、定められた重量(17〜8キログラム)のザックを背負いながら、登山道等を走破してそのタイムを競うものです。

会場は、森吉スキー場の滑走路を中心としたリフト山頂駅舎付近までの「登坂コース」が中心となりました。コースの延長は7・2kmで、標高差が約600mもあります。



この日は、曇り空に時折雨がこぼれる天気。成年男子・少年男子の午前10時30分のスタートを皮切りに4種目のレースが展開されました。スキー場周辺のコースを回った後に、こめつが山荘を経由してスキー場滑走コースへと展開されましたが、徐々にその角度を増す上り勾配が難所となり、参加選手を苦しめました。息を切らし、苦しさにあぐら選手たちを励ましてくれたのは、コース途中の「給水」「通過確認」を主とした地元森吉地域住民が主体の大会役員ら。「がんばれ」「水をやるぞ」「ラストだ。もう一息だ」等々の熱き声援・励ましの声がこだましました。



第62回国民体育大会山岳競技

開催期間 平成19年9月30日(日)~10月2日(火)の3日間

会場 森吉山特設コース(縦走競技) 森吉スポーツ公園(クライミング競技)

平成19年開催 君のハートよ位置につけ

秋田わか杉国体

北秋田市は、バレーボール、フェンシング、山岳、アーチェリーの会場です

